

繁殖雌豚の群飼と単飼における傷病の発生状況調査

改良部種畜課
令和5年3月

目的

豚は社会的な動物で、群で生活することを好む動物とされています。豚の飼養方式には単飼方式、群飼方式及び放牧方式がありますが、アニマルウェルフェアの観点から、群飼方式について、将来的な実施の検討が推奨されています。

本調査では、群飼方式と単飼方式の特徴によって、傷病の発生状況に差が見られるのではないかと考え、調査しました。

方法

家畜改良センター茨城牧場で飼養していた大ヨークシャー種の繁殖雌豚（令和2年度：群飼方式 66頭、3年度：単飼方式 69頭）を対象とし、のべ傷病発生件数を調査しました。なお、育種改良を行っている群が対象となることから、各年度の群は異なる個体で構成されていました。

結果

群飼方式で26件、単飼方式で21件の傷病が発生しました。

群飼方式では、うち10件で跛行の発生が見られましたが、単飼方式では見られませんでした。行動調査は行っていませんが、群飼方式の特徴として社会的順位確立等のための闘争行動や発情期の乗駕行動などが見られることから、これらの行動が跛行の発生に結びついている可能性がありました。

また単飼方式では、7件で妊娠・分娩期及び産後の疾患が見られましたが、群飼方式では3件に留まりました。これは単飼方式においては、ストールによる行動制限の影響により、糞尿から生殖器へ細菌が侵入し易く、これが流産や不受胎に結びついている可能性がありました。

まとめ

従来から言われている各方式の特徴（群飼方式：闘争行動等、単飼方式：行動制限等）が、群飼方式においては跛行に結びつき、単飼方式においては糞尿から生殖器への細菌侵入に結びついていると考えられました。これらのことから、どちらの方式で豚を飼養する場合でも、それぞれの特徴に合わせた対策を講じることが必要であると考えられます。

※なお、学会等での発表後に資料をホームページに掲載する予定です。